

Suggested Answer

7月28日、私は夜明け前(正確には午前4時)に起き、タクシーを拾って、マンハッタンの5番街にあるアップル社の小売店に向かった。夫に、誕生日プレゼントとして彼がとても欲しがっていたもの、つまり iPhone の新製品を買うために大勢の人と一緒に列に並んだ。彼は自分が本当に欲しいものを決めるために、もう何日もかけて店やネットで iPhone を調べており、彼は、自分が到着する前に私が行列の先頭まで行ってしまった場合に備えて、私に製品の仕様を暗記させた。私は何時間も待っている間に、その詳細を頭で何度も繰り返した。16 ギガバイト、4.5 インチのディスプレイ、黒、16 ギガバイト、4.5 インチのディスプレイ、黒。私がそろそろ先頭に近付いたというとき、夫が到着した。カウンターで、彼は、私がとても驚いたことに「気が変わった。白にする」と言った。

「あなたは確か私に、白の方が汚れやすいつて言ったわよね。それに黒の方がもっとしゃれてるって」と私は言葉を返した。

彼は返事した。「でもみんな、黒を買おうとしてる。他のみんなが持っているのと同じのを持ち歩くななんて僕にはできない」彼は自分がどれを欲しいのかも、欲しいものを欲しいと思う理由もわかっていたし、自分1人でその決宗をするにいたったこともわかっていた。それなのに、土壇場になって、自分がいいと思ったものを変えたのは、簡単に言えば、人の真似をしたくないからだった。

「真似をしない人」でいたいという欲求は、実はよく研究され、実証もされている。私のお気に入りの例は、ダン=アリエリーとジョナサン=レバブが小さな町で人気の、お酒も出すレストランで行った研究である。2人は接客係に、地元のビール会社の4種類の異なるビールの簡単な説明が載っているメニューを持って、2人以上の人がいる各テーブルを回ってもらった。客はそれぞれ1つだけ試飲品のビールを選んで飲んでみる事ができた。半分のテーブルでは、接客係は、レストランでの標準的なやり方だが、お客の注文を順番に聞いたのに対し、あとの半分では、一人一人に、そのテーブルにいた他の誰とも相談せず、自分の選んだものをカードにマークするよう頼んだ。カードに記入した場合は、同じテーブルの複数の人が同じビールを頼むことが多かったのに対し、自分たちのテーブルにいる他の人たちが注文しているものを聞いた場合は、重複することがはるかに少なかった。つまり、順番に注文していった客は、さまざまなものを注文し、試飲できるものはすべて選ぶことが多く、どれ1つとして過半数の注文を受けることはなかった。これは究極的に注文通りといった風に見えるが、違うのだろうか?誰もがまさ

しく自分が欲しいと言ったものを手にしているし、誰も同じものを試飲するよう無理強いされた気もしていないのだ。

しかしそのあと、自分たちが試飲したものをランク付けするよう求められると、どのビールを選んでいたかにかかわらず、順番に注文した人たちは自分が選んだものにあまり満足していないことがわかった。そのかわりに他のビールを選べばよかったと述べたのである。その一方で、個人的に注文した場合は、そのテーブルのみんなが同じビールを飲んでいる可能性が非常に高かったとしても、自分が飲んだ試供品に満足していると答えたのである。もっとも印象的なのは、連続して注文したテーブルのそれぞれに1人ずつだけ、単独で注文した人たちと同程度に満足度が高かった人がいた。最初に注文した人である。

最初に注文できる人は、自分に正直になること以外に義務がなかったが、それと同じビールを注文するつもりでいたその後続く客はそれぞれジレンマに直面した。さらっと「妙だね、僕もちょうどそれが飲みたいんだ!」と言うこともできただろうし、同じものを注文しているという自意識など脇にどけてしまうこともできただろうが、自分は人に影響されない人間だと主張したいという思いから、第二希望で良しとしたのだ。他の誰かが自分の第一希望のものを注文した瞬間、おかげさまで、自分の一番飲みたいビールを注文することよりも、自分がビールを独力で選ぶことができることの方がより重要となってしまったのである。

私たちは自らのアイデンティティを形成し、それを示すとき、他者に自分を、自分が自分のことをそう思っているように見てもらう必要がある。私たちは共通点を見つけたいと思うのだが、誰かの真似をする人にはなりたくない。その必要性はとても強いものなので、私たちはその「間違った」印象を生むのを避けるために、自分の本当の欲求とは一致しないような行動をすることすらあるかもしれないのだ。